

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 22 号

平成 16 年 2 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

印刷・発送人 〒285-0844 佐倉市上志津原 34 佐藤れん

電話 043-487-7030

矢内原忠雄全集第 17 巻より(1)

矢内原忠雄（明治 26 年 昭和 36 年）

内村鑑三、新渡戸稲造に学んだクリスチャンで、戦後南原繁先生に続いて東大総長に就任。信仰の月刊誌「嘉信」を発行、キリスト教の伝道に努めた。「キリスト教入門」、「イエス伝講話」、「ロマ書」などキリスト教の入門書を多く書いた。私がキリスト教に導かれたのは、最初矢内原先生の本を読んだからでありました。私にとって、矢内原先生は、キリスト教に導いてくださった恩人の一人であります。

略歴

明治 26 年 愛媛県今治市に生まれる。

明治 43 年 第一高等学校に入学。校長は新渡戸稲造。

明治 44 年 内村鑑三の聖書研究会に入門。柏会に属す。

大正 2 年 第一高等学校卒業、東京帝国大学法学部政治学科入学。

大正 6 年 大学卒業、住友総本店入社。愛媛県新居浜の別子鉱業所に勤務。

大正 9 年 新渡戸稲造先生の後をついで、東京帝国大学経済学部助教授として大学に戻る。

大正12年 教授。植民政策担当。

昭和12年 中央公論論文「国家の理想」等が問題となり、東京帝国大学教授を辞す。

昭和20年 東京帝国大学教授に復す。

昭和26年 東京大学総長

昭和36年12月25日 逝去。享年68歳。

主要著書 矢内原忠雄全集全29巻（昭和37年～39年）

世の尊敬する人物（岩波新書） イエス伝講話 ロマ書

キリスト教入門 武士道（新渡戸稲造著 翻訳）

暗誦している聖句から

1、神は愛なり

わたしたちは、神がわたしたちに対して持つておられる愛を知り、かつ信じている。神は愛である。愛のうちにいる者は、神におり、神も彼にいます。(ヨハネ第1書4・16)

或る時数日間病臥していた。そしてつくづく自分に空虚を感じた。殊に愛の無きことを思って、言い難き寂寥に陥った。

私は寝たまま額を見て居た。朝鮮の金太熙兄が誠心こめて書いて下さった『神即愛也』という四つの文字が、抵抗し難き力を以て私に迫って来た。『神は愛だ』。わたしの心は石の様に冷たくても、併し神は愛だ。世界は冷たくても神は愛だ。「神は愛なり」という言葉の故に、凡ての否定は肯定に変わるのだ。さう思った時、私の心は春の日を受けた氷の如くであった。

2. 女よ汝の罪赦されたり、安然に行け

イエスは振り向いて、この女を見て言われた、「娘よ、しっかりしなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです」。するとこの女はその時に、いやされた。(マタイ伝 9・22)

イエスにさう言はれた時、女の全身に神の愛がしみ透った。罪の赦しについての神学論はともあれ、神の御子キリストからこの御言葉を受けて我等の心は安らかならざるを得ない。靈魂の空虚は満たされ、身体の疲労も癒されて、心安らかに己が日常生活の義務に帰るのである。仕事のあるものは仕事の場所へ、病気のあるものは病気の床に、家庭のあるものは家庭の義務に。わが罪を赦して頂いて、我等は神の愛であることを疑ふことができない。

3 . 傷める葦を折ることなく、煙れる亜麻を消すことなし

彼が正義に勝ちを得させる時まで、
いためる葦を折ることがなく、
煙っている燈芯を消すこともない。

(マタイ 12・20)(イザヤ書 42・3 参照)

自分の言葉や顔付きや態度や行動やによって、弱き者の心を傷ける程口悔しいことは無い。その事なきやうに自制するけれども、世の煩ひ身の疲れを機会として、復繰り返しては人を傷つけ自分も傷を受ける。愛は凡ての律法を全うするものであるから、愛の無きことこそ罪の首である。

慕わしいかな、イエス・キリスト！ 彼は傷める葦をも折ることなく、煙れる亜麻をも消すことなく、弱き者をば弱きなりに労はり育ててその生命を完うしたまふ。自分の如き者をも踏みにじらずして、靈魂の救ひを完成して下さるのである。

4 . 人の世にあるは兵役の如くでないか

地上の人には、激しい労務があるではないか。

またその日は雇人の日のようではないか。

(ヨブ記 7・1)

人生は兵役の如くまた年期奉公の傭人の如くである。我等は忠実に義務を果たさうと思う。無意味だと思ふこと、理由のわからぬことでも、右向け右、左向け左、号令のままに、或る時は背囊かついで駈足、或る時は物蔭に身を潜めて息を殺す。我等は召し出されたものだから労苦を厭う者でない。又時には楽しみが労働そのものの中にあることもある。併しわが心の奥の願いは、苦しき月日憂はしき夜々が終わって、満期除隊の日の来ることである。神は必ずいつ迄も重荷を負わせ給ふことは無いであろう。

5 . 願わくは鳩のごとく羽翼のあらんことを

わたしは言います、

「どうか、はどのように翼をもちたいものだ。

そうすればわたしは飛び去って安きを得るであろう。

わたしは遠くのがれ去って、野に宿ろう。

はやてとあらしをのがれよう」と。

(詩篇第 55 編 6・7 節)

ああ鳩のやうに翼がほしい。我が肉体はおとろへ、わが靈魂は石臼の間に磨り潰される。世を離れて野に飛び行き、そこで息をつきたい。

飛べよ我が靈魂、遥かに飛べよ。鳩の如く遥かに飛びて神のふところに逃れよ。神は世事人事の煩ひから汝を解放し、汝の顔から涙を拭ひ給うであろう。

6. 慰めよ汝等わが民を慰めよ

あなたがたの神は言われる、
「慰めよ、わが民を慰めよ、
ねんごろにエルサレムに語り、これに呼ばわれ、
その服役の期は終り、
そのとがはずでにゆるされ、
そのもろもろの罪のために2倍の刑罰を
主の手から受けた。」

(イザヤ書第40章1・2節)

憂ひに沈み困り切っている者に対し、天来の嘉信である。私が悩み苦しむ最中に於て、何時でも遠方から夕立前の雷を聞くやうに、イザヤ書第40章が聞こえて来る。

7 . 汝等の内に善き業を始め給いし者は、終りの日迄に必ず之を成し遂げ給ふことを知る

そして、あなたがたのうちに良いわざを始められた方が、キリスト・イエスの日迄にそれを完成して下さるにちがいないと、確信している。(ピリピ書 1・6)

私が神を信じたのは私の業(わざ)ではなくて、神が私のうちに始め給うた業である。神によって義とせられた者として神の全きが如く全くありたいとの願ひも、凡て神ご自身が私のうちに起し給うた願ひである。自分の努力によってこの目的を達しようとするれば、ただ失望と苦しみを繰り返すだけである。併し神御自身が終りの日迄に之を成し遂げたまふというのであるから、我等は失望するにも当らず、また急ぐにも及ばない。安心して凡てを神に委ね、気ながくその時を待たう。

エンカウターの読者の皆様へ

いつも「エンカウター」を読んで頂き、ありがとうございます。
この小伝道誌は、私が読んで感銘を受けた主に霊想の書から、抜書きをするものです。神許し給わば、約 14 人の著者の本を、5 年ぐら
いかけて、それぞれ数か月分紹介するつもりでいます。

エンカウターは、志津の佐藤れんさんに、お願いをして、印刷
をして頂いて、約 12 部を発送して頂いております。

こんな小伝道誌であります。もしご友人等で、読んで喜んで頂
けそうな方がいらっしゃいましたら、コピーをとって、お送りして
頂けませんでしょうか。ひとりでも多くの方に読んで頂きたいとい
う気持ちがあります。

「ウィリアム・バークレーの一日一章」 1 月 23 日のところに出ていた詩。

手紙よ、野越え山越え海越えてゆけ、
お前を運ぶすべての人を、神よ、祝し給え。
目的地なる家の人々、
とりわけ宛名の人を祝したまえ。